厚生委員会　委員会視察報告

視察行程：平成28年10月26日〜28日

　　　　　１０月26日： 愛知県長久手市

支え合いマップづくり事業について

　　　　　１０月27日： 大阪府大阪市

大阪自彊館　三徳寮の取り組みについて

　　　　　１０月28日： 石川県金沢市

Share金沢の取り組みについて

視察者：委員長： 土屋　美恵子

　　　　副委員長： 笹岡　ゆうこ

　　　　委員： 下田ひろき、小美濃安弘、橋下しげき、西園寺みきこ、 深沢達也

厚生委員会（平成２８年１０月２６日〜２８日）

|  |
| --- |
| 日時： 平成２８年１０月２６日 |
| 視察先： 愛知県長久手市　長久手市役所 |
| 目的： 支え合いマップづくりについて学ぶ |
| 内容： 「支え合いマップづくり」の取り組みは、市内５０世帯ほどを１つの地区として、自治体連合会・区長、自治会、自主防災組織、民生委員、児童委員等らにグループ単位（５名〜１０名ほど）の参加をよびかけ、地区内のふれ合い・支え合いの実態を住宅地図に書き込み、取り組み課題の検討や具体化に向けた話し合いを月１回行っている。地域の人たちが見守りを必要とする人に気づき、お互いに支えあっていくまちづくりを目指し、平成２５年度から講演会を始め、平成２６年度から実施した。 |
| 成果（参考になった点）、課題等：今後の課題としては、市内全域への広がりを持つこと、個人情報を話し合うことへの拒絶感や批判があること、イベント的な集まりが多く、地域の見守り体制づくりまでに至っていないこと、継続的で自主的な活動にしていくこと、６０代・７０代だけでなく若い世代や子どもたちを巻き込んでいくこと、災害時にも役立てるような仕組みにしていくこと、であり、どこの自治体も変わらないものであると感じた。  本市においても同様に事業の「災害時要援護者対策事業」があり、近所の住民が事前に登録を受けた高齢者や障がい者など要援護者の安否を確認する仕組みがあり、市民・地域社協などが協力して支え合う取り組みを行っている。  今後もよりこの取り組みを進めていくとともに、地域の支えあい活動を活発なものとしていきたい。 |

厚生委員会（平成２８年１０月２６日〜２８日）

|  |
| --- |
| 日時： 平成２８年１０月２７日 |
| 視察先： 大阪府大阪市　大阪自彊館 |
| 目的： 社会福祉法人　大阪自彊館　三徳寮の取り組みについて |
| 内容： 大阪自彊館は、明治４５年釜ヶ崎（現・あいりん地域）の窮状に対し、「自彊不足」の精神で１００年以上、生活困窮者支援に加え、現在では高齢者支援・障がい者支援にも取り組み、あいりん地区以外にも滋賀県高島市・大阪市東淀区など広域に渡って事業を展開している。  Macintosh HD:Users:yukosasaoka:Desktop:IMG_4715.jpgMacintosh HD:Users:yukosasaoka:Desktop:IMG_4712.JPG身体上または精神上なんらかの障がいがあって、独立して日常生活を送ることができない方が入所し、生活扶助を受ける施設としての三徳寮のほか、大阪自彊館は就労支援、自立支援を大切にしている。例えば、居宅保護で施設を退所した利用者が、住んでいる地域に馴染めないことがないように通所や訪問、ボランティア活動や作業訓練等を行う、保護施設通所事業（生活保護法）は定員７５名であるが実際は９３名が利用していて、ニーズが高い中、法人の持ち出しで行っている。  その他にも、日本一結核の罹患率が高いとさせるあいりん地域における、地域内結核対策事業として朝・昼・夕とCR車を配車し、DOTS（対面服薬・訪問服薬）なども個別に行っている。  また、生活保護申請から決定までの期間に資金を貸し出す厚生援護資金事業（市からの受託事業）やその期間だけ一時的に入所する無料定額宿泊事業、生計困難者に対する相談支援事業（第二種社会福祉事業）や、生活困窮者就労訓練事業（生活困窮者自立支援法：公益事業）など、地道で継続的な取り組みをしている。  また、居場所づくりとして新今宮文庫運営事業（教育委員会からの受託事業）があり、本の寄付や法人の持ち出しを元にして、ひと月9,000人の利用がある。  また、巡回事業としては、夜間の巡回と昼間の巡回事業があるが、以前として屋外で生活する人が約６００名、屋外で死亡する人が年間約１００名いるとのことだ。  警察等と連携した緊急一時宿泊事業や、福祉センターと連携した単泊事業、相談室や生活ケアセンターなど、民間の良さを生かして有意義で使い勝手の良いサービスを提供している。 |
| 成果（参考になった点）、課題等： あいりん地区と武蔵野市では、地域の歴史や背景が大きく違っている。施設の方によると、「地区のニーズに合わせてサービスを変えて行くこと」「継続的なアプローチをしていくこと」「民間のフットサークの軽さを最大限活かすこと」が大切であるとのことで、根気強く継続的な取り組みをしていくことの重要性を感じた。加えて、DOTS（対面服薬確認治療）や出所した後のケアなど、一人ひとりに丁寧に寄り添った取り組みに驚くと共に、今後本市でもより一層そのような個々のニーズに合わせた取り組みが重要になっていくだろうと感じた。 |

厚生委員会（平成２８年１０月２６日〜２８日）

|  |
| --- |
| 日時： 平成２８年１０月２８日 |
| 視察先： 石川県　金沢市　Share金沢 |
| 目的：社会福祉法人　佛子園　Share金沢の取り組みについて学ぶ |
| 内容： 日本版 CCRC政府認定モデルとして有名なShare金沢であるが、障がい者を中心として高齢者を見守り役にしながら、全ての人が社会から隔離されることなく、「みんなが共に助け合って生きて行くこと」をテーマにした生涯活躍のコミュニティである。  2014年にオープンしたShare金沢は、敷地は佛子園が病院跡（結核患者のサナトリウム）に「ごちゃまぜ福祉」として住まいや文化施設を配置し、人々に活気や役割が生まれ、誰もがいろいろな人と触れ合えるようなまちづくりをしている。  Macintosh HD:Users:yukosasaoka:Desktop:IMG_4793.JPG知的障がい児の施設は県外になかった為、「障がいがあってもなくてもみんな仏様の子ども」という考えのもと、障がいのある子どもたちの居場所作りをすることがもともとの目的であった。社会福祉法人佛子園は、今では金沢市内で１０３事業を抱えている。  Macintosh HD:Users:yukosasaoka:Desktop:IMG_4789.JPGShare金沢は、天然温泉、レストラン、ギャラリー、高齢者デイサービス・生活介護、訪問介護、サービス付き高齢者住宅、アトリエ付き学生向け住宅、学生向け住宅、児童入所施設、児童発達支援センター、全天候型グラウンド、共同売店、ブータンセレクトショップ、ドックラン・アルパカ牧場、来年度からは学童クラブや大学と連携したインターンシップなど、様々な属性の人々が共に暮らし、利用するまちとなっている。「私が作るまち」をコンセプトに、住民参加を必須として地域参加を促している。  障がいを持って親と離れて暮らす子どもたちだけではなく、毎日約４０名の特定難病障がいのある人々が働きに来る。  Share金沢の地域付近は、２０１０年坂下に環状道路が出来、土地区画整理も進んだため、３０代のファミリー層が増えてきているという。まち開きをして１年半経った現在、ようやく地域と連携出来てきたという実感があるとのことで、今後は一層「専門家だけではなく、地域の人と一緒に考えていく」ことを大切にした地域づくり、コミュニティ作りに取り組んでいくとのことだ。 |
| 成果（参考になった点）、課題等： 「ごちゃまぜ福祉」という概念は、武蔵野にはまだ馴染みがないものかもしれないが、コミュニティ作りの根幹を指すものであると感じた。高齢者だけ、障がい児者だけ、の施設が作られる傾向にあるが、それではまちではなく、ただの施設となってしまうため、障がい福祉をワンストップで受け入れてきた、という。今まで地域の中で住みにくいと言われてきた人々が、人に必要とされ、多くの交流の中で、結果的に双方が成長することができるのだと思った。  Share金沢のコミュニティづくりにおいて、最も重点を置いていることは「自主性」と「交流人口の多さ」であると感じた。  地域住民が日常的に利用し、社会的関わりを持ち、定着していくことが大切であり、そのためには、大きなイベントを１つするのではなく、小さなことを継続的に仕掛け続けることがポイントになると気づくことが出来た。  また、施設長がおっしゃっていた「子どもの頃から様々な人々に関わって育った子どもが心の垣根が低い大人になるのでは、と考えるし、そう期待している」という言葉が印象的であった。真の心のバリアフリーは、日常生活に密接していると感じたからである。今後武蔵野でも、多くのところで参考にしたまちづくりをしていきたいと考える。 |